

G 脈の長さの異常

脈拍は通常「寸・関・尺」の部位で明らかに触れるが、寸～尺を超えたり、寸～尺に満たない場合が、長さの異常である。

1. 長脈（ちょうみやく）

脈象：首尾端直，超過本位
主病：肝陽有余・陽盛内熱

脈がまっすぐで長く、寸部～尺部を超えて触れる。

(1) 正常脈

脈が長くゆったりと拍動し、適度の太さを示すのは、中気が充足して気血に不足がなく、血脈の流行がのびやかなことをあらわす。『内経』に「長はすなわち治まる」と指摘されているように、健常な脈象である。

(2) 肝陽有余・陽盛内熱

肝陽が有余し陽熱が内盛となって脈気が伸長し、長脈となる。

肝陽有余・陽盛内熱では、脈は長で弦硬を呈する（動脈硬化症・高血圧症などでみられる）。

長脈で他の脈象を兼ねる場合は病脈であり、実証を示す。

2. 短脈（たんみやく）

脈象：首尾俱短，不能満部
主病：気虚

脈が短くて、関部では触れるが、寸部・尺部では触れにくい。

心臓からの輸出が低下しているが、血管壁の弾力性はなお、ある程度保持されており、血管の拍動が小範囲に限局されながら伝達している状態と考えられる（重度の大動脈弁狭窄症などでみられることが多い）。

(1) 気虚

陽気が虚して血脈を鼓勵する力が弱いために、短で無力を呈する。『内経』に「短はすなわち気病む」とあるとおりである。

短脈の多くは無力であり、気陰両虚の状態でもみられる。

(2) 気鬱

何らかの原因で気鬱を生じると、疏泄が失調して脈が短になることがある。有力であることで判断する。